

『淫呪の疼き -溺愛鬼と忘れ形見の術師-』

著：高月紅葉

ill：笠井あゆみ

瑞々しい緑苔へ散り広がる、沙羅双樹の花は可憐だ。

しかし、かたわらにたたずむ青年の心は、花を觀賞する余裕もなく、もの憂い。

この春に看板を掲げたばかりの封印師・瀧ノ瀬嘉槻は、またしても入った横檜に気づき、苔の上の花から視線を転じた。

「いや、あの……」

機械仕掛けの人形のように腰を折って弁解していた男が、くしゃくしゃになった手拭いでしきりと額の汗を押さえる。安物の背広は汗でよれて、見るからに暑苦しい。

対する嘉槻の夏背広は、腰あたりを詰めたダブルブレストで、生成り色が涼しげな風情だ。仕立ての妙がある。華奢な彼の身体を遊ばせながら包んでも不格好に見せない。

首筋も、額や頬も、透けるように白い肌をしていて、残り梅雨の湿った風に吹かれる黒髪は悩ましいほど艶を帯びている。

「あ、あ、これは、足代として取っておいて……。いやあ、本当に申し訳ない」

封筒を握らせてきた指が、さりげなさを装って手の甲を撫でる。

嘉槻はひっそりと柳眉を震わせ、受け取った封筒を背広の内ポケットへしまふ。丁寧に一礼をした。

「御用はないようですから、これで失礼します」

身体を起こして、判で押したような挨拶を口にする。

まだなにか言いたげな相手は完全無視だ。もはや、なにの関係もない。

ただ、苔庭で悠然と枝を伸ばす沙羅双樹の古木に対しては、名残惜しさを感じた。咲き姿そのままに根元から落ちる純白の花は、鮮やかな萌黄色の苔の上にあっけいまだ朽ちていない。

花と苔のコントラストを目に焼きつけた嘉槻は、夏めく陽差しが照り返す砂利道を歩き出した。このあたりでもひととき広い敷地を持つ旧家だ。

古い蔵が三つも四つも建っていて、庭には池があり、川も引かれている。純日本建築の屋敷は堂々たる大きさだ。

屋敷門へ向っていた嘉槻は、なにげなく玄関のあたりを見た。

案の定、ダークカラーの背広を着た若い男がふたり、こちらへ視線を投げてくる。無視をするには距離が近く、申し訳程度に会釈を送った。

「顔で仕事が取れるとでも思ってんのかね」

陰のある声が聞こえ、思わず足を止める。

背広の襟につけた家紋章で、関東全域を管轄する『祥風堂』の関係者だとわかった。本家である鬼束家の術師を筆頭に、分家の術師や外部の術師を抱えている指折りの術師集団だ。

術師には二種類ある。さまざまな憑きものを落として霊障を封じる封印師と、少ないながらもいまだに存在している『鬼』を退治する退魔師だ。

どちらの術師も、持って生まれた霊力と修行で得た呪力を駆使し、古くから伝わる呪術を扱う。

「仕事を横取りしておいて、厚顔無恥にもほどがあるのでは？」

値踏みしてくる視線に対し、嘉槻は堂々と言い返した。

まさか反撃されるとは思わなかったのだろう。ふたりの男たちは怯み、すぐに気色ばんだ。年の頃は嘉槻と同じく二十代半ばに見えるが、実力の差は歴然としている。

屋敷玄関の立ち番は、儀式に参加できない封印師見習いがこなす雑用だ。

「恥知らずがよくも言ったな」

男のひとりが、ずいっと前へ出てくる。態度ばかりは一人前に偉そうだ。

「なにが『槐風堂』だ。鬼の呪いを受けて本家から追い出されたくせに。どんなに修行をしても、そんな穢れた身体じゃあなあ。……どこの鬼が相手かは知らないけどさあ、もうヤラれちゃってんだろ？」

にやにやと笑いながら覗き込まれ、嘉槻はうんざりしながら相手を見据えた。優美な曲線の眉を上げたが睨んだりはしない。そんな労力さえ無駄だ。

しかし、またしても仕事を横取りされた怒りは湧いてくる。

憂さ晴らしに言い返してやろうと口を開きかけた嘉槻は、己の背後に人が立つ気配を感じて押し黙った。

つい先ほどまで、微塵も感じなかった雰囲気、まるで降って湧いたように背中へ添う。

下世話な勘繰りをしていた男たちは、揃いも揃って小動物の仕草で両肩をすくめ、現れいでた存在を見上げながらあたふたとあとずさった。

「かまわないでください」

嘉槻は肩の位置で手を挙げ、背後の存在感に対して制止の意図を示した。目の端に映ったのは墨色の衣服だ。確認するまでもなく、背広姿の青柳が立っている。

一九〇センチの長身だけでも威圧感があるのに、涼しく端正な美貌で睨みを利かせているに違いない。

男たちの視線は挙動不審に動き回り、嘉槻は同情を禁じ得なかった。あまりにみっともなくて憐れだ。

「あ、あんまり図に乗るなよっ！」

「たいした実力もないくせにな……っ」

捨て台詞を吐いたかと思うと、ぱっと身を翻して走り去る。

「……持ち場を離れるなんて」

あきれてしまった嘉槻は、肩越しに振り向いた。

普段から神出鬼没な青柳は、涼しげな表情でにこりと微笑む。墨色の背広がよく似合い、美丈夫の彼が立つ場所だけ異空間に思える。

「さあ、帰ろう」

声をかけられ、手のひらが背中に添った。嘉槻は小さくうなずいて歩き出す。

ふたりで屋敷門を出て、古い堀が並ぶ通りに行く。

すぐに小さな駅舎が見えてきた。素通りして裏通りへ入り、小高い山へ向かう。さらに先には古都を囲う屏風のような山の稜線が見えた。空は青々として広く、夏雲が湧き立っている。

槐風堂という屋号で封印師を始める数か月前まで、嘉槻は青柳と共に山奥で暮らしていた。六年の月日は過酷な修行にあてられ、十八歳だった嘉槻は二十四歳になった。

「残念だったな、嘉槻」

慰める青柳の声は穏やかに低い。しかし澄んでいた。

「想定内です」

仕事の邪魔をされるのも、嫌味を言われるのも、今日が初めてではない。答えた嘉槻はきつちりと締めたネクタイもそのままに、内ポケットから封筒を取り出した。

「足代はいただきました。しばらくの食費にはなるんじゃないですか」

「それは良かった。そろそろ新しい酒が欲しかったところだ」

「食費、って言ったんです」

「まあ、固いことを言うな。嘉槻も、薄めた酒は好まないだろう」

「それは、そうですけど……」

ちらりと視線を向けて、言葉を飲み込む。

青柳の容姿は、出会ったときから微塵も変わっていない。そもそも彼は歳を取らない存在だ。

精悍な頬をした彫りの深い顔立ちで、くっきりと刻まれた二重のまぶたと思慮深げな黒い瞳が印象深い。極めて端正で涼しげな印象の男だが、術師たちを圧倒する呪力をその身に秘めている。

先ほどの未熟な術師は言うまでもなく、よほどの熟練術師でなければ、彼の正体に気づくことはできない。

青柳は、当代一と言っても不足のない『高等鬼種』だ。

鬼と言っても、頭に角はなく、寝入ったところをこっそり調べたことがあるのだが、黒い髪を分けても、小さなコブひとつ盛りあがっていなかった。

あれは、嘉槻が二十歳になった頃だ。

成人の祝いだと酒を飲まされ、泥酔した嘉槻は眠りこけた。夢うつつに目を覚ますと、青柳の膝を枕に転がっていて、彼もまた、簡素な庵の柱にもたれて目を閉じていた。

鬼のほとんどが異形だが、まれに、青柳のように人の形をした高等鬼種が存在する。

文献によれば、前者は理性に乏しく、人語も理解しない生まれながらの異形で、後者は人間が外道に落ちたなれの果てだ。人間の言葉を理解し、人間のように暮らし、飲食を愉しみ、戯れに男女を抱く。

精気を吸い取って食らい尽くすことにおいては、どの鬼も変わりがない。そのために、鬼は人間へ呪いを仕掛ける。相手が自分の獲物である印をつけ、呪いによって精気を増幅させ、少しずつ吸い取っていく。その味に飽きた最後には、骨も残らず食らい尽くされるのだ。

鬼にとっての人間は、保存の利く食べ物のひとつでしかない。

夏の陽差しの中を歩くふたりは、小高い山の入り口へたどり着いた。

雑草が繁った向こうに、簡素な腰高の木戸がある。

草の匂いが立ち込める中、先に入った青柳が木戸を押さえた。

先を譲られて足を踏み入れる嘉槻は、世界がスライドして入れ替わる微妙な違和感を飲み込んだ。入って三歩も進めば、違和感は消え、いつものごとく身体が順応する。

外からは雑木林にしか見えないが、結界の中には青草が左右で揺れる、ゆるやかなつづら折りの階段があり、平屋の日本家屋が竹林に包まれている。

青柳の張った結界は強固だ。どんな動物も霊体も中へ入ることは叶わない。

本来であれば、嘉槻もまた、呪力に差がある青柳の結界内には入れないはずだった。おそらく入り口を見つけることもできない。

しかし、青柳に承認されているので行き来は自由だ。

「ただいま」

玄関の引き戸がカラリと音を立てて開く。十八歳まで親と暮らしていた嘉槻には、無人の家でも帰り着けば声をかける習慣が残っている。

ひんやりと涼しい土間で靴を脱ぎ、廊下を台所まで一直線に進む。

流し台の前に作られた窓から差し込む太陽光で室内は薄明るい。

夏背広をイスの背にかけ、グラスを手にした嘉槻は、水道の蛇口をひねった。冷たい井戸水を注ぎ、タイル張りの流し台を掴みながら、ひと息に飲み干す。

「ああ、暑かった」

出かけるときは梅雨寒の気配が残っていたが、雲が流れて日が差せば、すっかり夏の暑さだ。

「日が傾いたら、酒屋へ行こう」

青柳の声が間近で聞こえ、流し台を掴んだ嘉槻の手に指が這う。ふいに、封筒を渡してきた男の汗ばんだ指を思い出した。野卑な下心だ。腹立ちがよみがえり、気分が悪くなる。

それも、つかの間のことだ。

顔を覗き込んできた青柳のくちびるが頬へ触れてくる。

大きな手のひらにグラスを取られ、流し台の中へ置かれる。指先が嘉槻の白い頬へ這う。

汲みあげた井戸水に似て、ひんやりと冷たく心地が良かった。

結界の外で起こった苛立ちのすべてがなだめられ、汗ばんだ男の指をすっかりと忘れる。

「ん……」

嘉槻の息づかいが、静かな台所の空気に沈む。

ぴつたりと合わさった青柳のくちびるはなまめかしく動き、嘉槻のくちびるを食んだ。思わず引いた腰に青柳の腕が回る。指先の冷たさとは裏腹に、青柳のくちびるは熱を帯びていて、くち

づけに慣れることのない嘉槻は戸惑った。

しかし、これはふたりに定められた慣例だ。

嘉槻の内太ももの皮膚が引きつれ痺れる。こもった熱の固まりがゆるやかに溶けていく感覚がした。

嚴重に張り巡らされた青柳の結界内へ踏み入れることができるのは、彼に許されているからだ。家の結界を出入りするたび、忘れることのできない事実を突きつけられる。

つまり、本家から見捨てられ、穢れた身体だと揶揄される理由だ。

それこそが、青柳からの呪いだっただ。

淫呪と呼ばれる呪いを受けた身には淫欲が湧く。つまりは欲情であり、精力だ。鬼は性的な行為や体液を摂取することで人間の精気を吸い、栄養分に変える。

細かなことはわからないが、くちづけだけでも青柳は嘉槻から精気を吸い取っていく。そして、淫呪をかけられた嘉槻は青柳に精気を吸われることでしか欲情を発散できない。

「……そ、んな……に……」

手のひらで胸を押し返しても、身を屈めた青柳はびくともしない。いっそう抱き寄せられ、あごを反らした嘉槻は逃げようと首を振った。

「……やっ」

子どもっぽい声がこぼれ、ハッと息を飲む。

くちびるを離れた青柳が、至近距離でにやりと笑う。

「し、しつこい……」

強がって言い返したが、嘉槻の頬は恥ずかしさで火照った。

両親を失い、呪いを受け、その上に重傷を負っていた嘉槻は、青柳にさらわれた。そして、そのまま山の庵に住み着き、修行が始まったのだ。淫呪をかけられたと知ったときから、祥風堂に戻れないことは自覚していた。

そういうものだ。山の中で起こったことは、山の中で処理される。

「嘉槻はもう、子どもじゃないだろう」

まるで口説くようにささやかれ、背中にぞくりと震えが走る。嘉槻はさらに戸惑い、青柳を突き飛ばして逃げ出したくなった。

彼の『淫呪』を刻まれた身体は、特別なことをされていなくても欲情を覚える。

湧き上がる欲は嘉槻に年相応の欲を感じさせたが、青柳はまだ、くちづけしかしない。

細い手首をしっかりと掴まれ、腰を抱かれ、身体をひねることもできない嘉槻は流し台へ追い込まれていた。熱くなる下半身を悟られはしないかと、気が気でない。

じっと見つめてくる青柳が口を開いた。

「きみから、くちづけしてくれ」

「……どうして、僕が……んっ」

青柳の顔がふたたび近づいてきて、嘉槻はぎゅっとくちびるを閉じた。からかわれているようで気が悪い。しかし、舌先でペロリとくちびるを舐められ、身体がすくんでしまう。

じわじわと腰が熱くなり、火照りが全身に広がる。あきらかな淫欲の芽生えだ。

「きみはすっかり年頃だ。くちづけだけで我慢できなくなるのも、時間の問題じゃないか」

「……知らなっ……い……。ん、ちょっ……あ……」

何度もくちびるが重なり、角度を変えて押しつけられる。下くちびるをねっとりと吸われ、青柳のくちびるを追いかけそうになって我に返る。伏せたまつげを押しあげて、相手をきつく睨んだ。

「……これぐらいで、いいでしょう」

肩で息をして、どぎまぎと顔を背ける。くちびるを手の甲で拭いながら、青柳の手を振りほどいて離れた。激しくくちづけで煽られ、身体が反応を示す。足はふらつき、流し台に腰を預けながらため息をつく。

「青柳は、しつこい……」

「仕方がないだろう。年頃の獲物がそばにいれば、いままでのようにはいかない」

「どういう意味？」

強い口調で返したが、飄々とした青柳には通じない。整った顔つきは、憎らしいほどに涼しげだ。

「俺はいままで一度も人間を食わなかったんだ。食べてしまっっては味わえなくなる」

「……じゃあ、僕が最初の犠牲者ってこと、ですね……？」

おそるおそる口にすると、背広を着た青柳は肩をすくめて笑い出す。

「嘉槻は、もう少し、話が通じるようにならなければ……な」

「え？ どういうことですか？」

「いや、あれだ。まだ耳学問も足りてないって話さ」

「まったく、意味がわかりません」

首をひねって答えたが、子ども扱いされていることだけはわかる。嘉槻はけぶるようなまつげを不満げに震わせた。

「そのうちにわかる」

身を屈めた青柳が眩しそうに目を細める。意地の悪いやり取りは、一緒に暮らしてからずっと続いているものだ。

鬼と人間。食う者と食われる者。

呪いを受けた以上、その関係は鬼が消滅するまで覆らない。

「さて、今晚は金平牛蒡と筑前煮と、どちらの気分だ」

「どっちでもかまいません。砂糖と塩を間違えないなら」

「難しいところだな」

精悍な頬をゆるめた青柳は、太い首筋に指先を添える。なにげない仕草だが色気があり、嘉槻はあわてて顔を逸らした。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>